

令和元年6月19日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05950

研究課題名（和文）日中戦争下におけるスターリンと蒋介石の往復書簡の分析

研究課題名（英文）Correspondence between Chiang Kai-shek and Stalin during the Sino-Japanese war of 1937-1945

研究代表者

麻田 雅文（Asada, Masafumi）

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：30626205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,100,000円

研究成果の概要（和文）：日中戦争下の1937年から1945年にかけて、蒋介石が連合国の指導者たちと交わした書簡を収集した。具体的にはスターリン、ローズヴェルト、チャーチルとの往復書簡である。こうした電報や手紙には、各国の首脳の苦悩や希望が如実に反映されており、見るべき物がある。社交辞令や時候の挨拶だけのものや、美辞麗句に彩られて本音をうかがうこともできないものも多い。しかしそうした書簡であっても、発信された理由や時期を考えると、様々なことを教えてくれる。日中戦争の戦場では、中国側は常に劣勢に立たされた。しかし蒋介石にとって、外交は日中戦争を勝ち抜くためのもう一つの戦場だった。そのための武器が書簡であったと言えよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦時中の蒋介石の外交は、各国との平等を求めるものだったと先行研究では分析されている。しかし問題は、では各国はどのように蒋介石と中国を扱ったのかどうかだ。これは、中国側の外交文書や、蒋介石の日記を読むだけでは分からない。交渉相手の文書も読んで、はじめて分かることである。そうした双方の視点を積み重ねることで、世界史の中の日中戦争を位置づけることが可能となる。手紙は対外的な「表の顔」であるのに対し、近年公開された日記は「裏の顔」だ。「表の顔」の分析をせず、日記で「裏の顔」を暴くことに執着するのは、外交の分析としては本末転倒である。日記と手紙の両方を分析することで、蒋介石の多角的な外交は明らかになる。

研究成果の概要（英文）：Correspondence between Chiang Kai-shek and foreign leaders is the key to understand second world war in Asia. In this grant, I collected the letters and telegrams from Franklin Roosevelt, Churchill and Stalin to Chiang. Recently, their documents are open in the internet archives. From these documents, it was revealed that although Chiang was underestimated by them, he wrote many letters to solve China. Most of them are ignored, but his letter sometimes contributed to save the worst of his country. These letters were final weapon for Chiang.

研究分野：東アジア国際政治史

キーワード：蒋介石 スターリン チャーチル ローズヴェルト 日中戦争 アジア太平洋戦争

1. 研究開始当初の背景

メールはもちろん存在せず、電話での首脳会談も成立しえなかった日中戦争から第二次世界大戦の期間に、連合国の首脳たちの意思疎通の手段は、主に三つあった。首脳会談、外交官の派遣、そして書簡である。書簡は本人の意思を伝えるものとして、外交文書の中でも最も重視された。

蒋介石を除くと、連合国の指導者たちの手紙は、1950年代から書籍にまとめられている。その理由として、ローズヴェルトが1945年に死去し、スターリンも1953年に死去して、歴史上の人物になったことが大きい。1957年には、早くもスターリンと英米の首脳間の手紙のやり取りがソ連外務省によって刊行され、翌年には英語版が出版された。

だが、蒋介石と各国首脳たちとの往復書簡となると、話は別である。例外的に、書籍の形でまとめられているのは、ローズヴェルトとの往復書簡だけである。こうした背景のもと、蒋介石と各国の指導者の往復書簡を分析することで、大戦中の中国外交を再構築することを目標とした。

2. 研究の目的

日中戦争下の蒋介石の戦争指導は、良く言えば「持久戦」であり、悪く言えば「消極的抵抗」であった。国内でも、第二次国共合作で提携していた中国共産党と、日中戦争下にもかかわらず衝突し、あわや内戦という事態にまでなった。こうしたことから、蒋介石には、真剣に日本軍と戦っていたのか、というイメージが日本ではつきまとう。

しかし、蒋介石は彼なりの方法で戦っていた。彼が監督する戦場は、実際の戦場だけではない。後方支援や宣伝活動、そして外交においても蒋介石の指導力が発揮されていた。その事実を雄弁に物語るのは、蒋介石がフランクリン・ローズヴェルト、ウィンストン・チャーチル、ヨシフ・スターリンをはじめとする連合国の首脳とかわした書簡の数々である。本研究は、こうした往復書簡を分析する事で、日中戦争下の蒋介石の外交を再考しようという試みである。

3. 研究の方法

アメリカ、イギリス、ソ連の外交文書中にある、蒋介石との書簡のやり取りを収集した。また、ローズヴェルト、チャーチル、スターリンの個人文書からも史料を収集した。アメリカなど、現地でも史料を収集したが、彼らについては、オンライン上で史料の公開が進んでいる。

一方、台湾の総統府直属の歴史研究機関である台北の國史館は、蒋介石と各国の指導者の往復書簡を所蔵している。いくつかの書簡が『中華民國重要史料初編』の第三篇「戦時外交」に収録されている。この他にも書簡は多数あり、現地で収集するなどした。

4. 研究成果

助成期間中に分析を進めた、蒋介石とスターリンの往復書簡についてのみ述べる。蒋介石からの手紙の内容は、主に四つに分けられる。

ソ連が日中戦争へと直接介入し、ともに日本軍と戦うことを願うもの（対日参戦）

ソ連が中国と抗日統一戦線戦を組む同盟国となることを願うもの（同盟樹立）

日本と戦うための軍需物資をソ連へ懇願するもの（武器援助）

11月7日のロシア革命記念日や、スターリンの誕生日の祝電。

手紙の内容は、その時々状況に応じてこの三つの要素が入れ替わっている。

蒋介石にとっては、 が最も望ましく、 、 と希望順位が下がる。しかし、 を受け入れてもらえなければ、 でも でもとりあえずスターリンを動かしたい。ゆえに、蒋介石の書簡はその分量が多くなったと思われる。1942年以降は がそのほとんどを占めるようになるが、それは蒋介石にとって、アメリカがソ連よりも重要になったためと推測している。もはや、スターリンとの往復書簡は、いくつかの例外を除いて、儀礼的なものへと変質していった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

麻田雅文「ソ連はいかに日中戦争に関与したのか」『東方』459号、30-34頁、2019年5月(査読無し)

<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000042035-00>

麻田雅文「蒋介石の書簡外交——1936～1941年」『学習院史学』56号、139-147頁、2018年

3月(査読無し)

<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000003630-00>

Masafumi Asada, "Quiet Occupation: The Chinese Eastern Railway under Japan and the Soviet Union, 1931-1935," *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 75 (May 2018), pp. 119-142 (査読有り).

https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=3108&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

[学会発表](計 8件)

麻田雅文「1920年代のソ連承認をめぐる国際政治」国際政治学会 2018年度大会、2018年11月3日

麻田雅文「シベリア出兵のデジタル化史料」東方経済フォーラム 2018年、2018年9月10日

麻田雅文「日ソ基本条約(1925年)締結交渉の再検討——ソ連側の動向を中心に」20世紀と日本研究会、2018年3月3日

麻田雅文「チェコスロヴァキア軍団と日本の軍人たち(1918-1920年)」チェコスロヴァキア軍団と日本、2017年12月16日

麻田雅文「ロシア革命100周年、シベリア出兵99周年に思う」さまざまな<ロシア革命>—100年後のいま、ふり返る、2017年7月15日

麻田雅文「第一次大戦前後における後藤新平の対露接近論とその手段の変遷 - 元老擁立、シベリア出兵、対ソ国交樹立」第22回東アジア近代史学会研究大会、2017年6月18日

麻田雅文「蒋介石の書簡外交、1936-41年 ヒトラー、スターリンとの往復書簡を中心に」学習院大学史学会大会、2017年6月17日

麻田雅文「松岡洋右——日露外交のトリックスター」近代日本政治外交史研究会、2017年5月13日

[図書](計 3件)

麻田雅文「ソ連との「戦後処理」」20世紀と日本」研究会編『もうひとつの戦後史 第一次世界大戦後の日本・アジア・太平洋』千倉書房、2019年3月。

麻田雅文『日露近代史——戦争と平和の百年』講談社現代新書、2018年4月。

麻田雅文「スターリンと石原莞爾——満ソ国境をめぐる攻防」松井康浩、中嶋毅編『スターリニズムという文明』岩波書店、2017年7月。

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。